東密における機根論の展開

亀山隆彦

はじめに

空海没後の真言宗で大きな問題として取り扱われ、また、様々に展開した議論の一つに、〈大機〉〈小機〉を中心とした真言行者の機の差別、すなわち機根論の問題が挙げられる。

十二世紀の真言宗では、高野山再興の立役者として、興教大師覚鑁（一〇九五～一一四三）（以下覚鑁）が登場し、その主要著作である『五輪九字明秘密釈』において、この〈大機〉〈小機〉を中心に据えた機根論を展開した。また、後の新義真言宗の派祖となる頼瑜（一二二六～一三〇四）は、〈大機〉〈小機〉を以て、「即身成仏」の中の「一生成仏」「二生成仏」であるとし、更に、室町時代に登場した聖憲（一三〇七～一三九二）と、その主要著作である『大疏百条第三重』（以下『大疏百条』）も、〈大機〉〈小機〉〈結縁機〉の三種の機と、それに伴う真言行者の格差を説いた。

本論文は、「東密における機根論の展開」と題し、この空海以降の真言宗で度々論じられた、真言宗の行者における〈大機〉〈小機〉の機根論が、どの様に始まり、いかに展開していったのかについて検討する。

問題の所在

まず、この真言宗における〈大機〉〈小機〉が、いつ頃から説かれはじめたのかということだが、その起源は、六本存在する『異本即身成仏義』の内の一本、『真言宗即身成仏義』に求める事が出来ると考える。その理由として、以下の三点が挙げられる。

①まず、空海自身、その著作で〈大機〉〈小機〉に言及することはなく、『弁顕密二教論』においては、次のようにまで述べている。

> 夫仏有二三身一教則二種。応化開説名曰二顕教一。言顕略逗レ機。法仏談話謂之密蔵。《中略》此三密門者。所謂如来内証智境界也。等覚十地不レ能レ入レ室。何況二乗凡夫誰得レ昇レ堂。故地論釈論称二其離一レ機。『弁顕密二教論』巻上（『大正新脩大蔵経』

巻七七・三七四頁・下段～三七五頁・上段）

これらを鑑みれば、空海が、真言宗の行者における〈大機〉〈小機〉や、一切の機根の差別を考慮していない事は明らかである。

②また、空海が真言宗を樹立する上で多く用いた『大日経』『金剛頂経』『菩提心論』等にも、〈大機〉〈小機〉、更には密教に於ける機根の差別は論じられていない。

③更に近年の研究[①]によれば、『真言宗即身成仏義』は、済暹（一〇二五～一一一五）の『顕密差別問答』にその引用が見られることから、遅くとも一一一五年までの成立と考えられている。これは、覚鑁が『五輪九字明秘密釈』を撰述し、五種の機根を説く二十年以上前に当たる[②]。

次に、その『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉が、説かれた理由だが、これに関しては、空海の『即身成仏義』中に引用される『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の二文と、更にそこにおいて述べられる十六大菩薩生と即身成仏の問題を解釈する為ということが、近年の研究において既に指摘されている[③]。

しかし、この『即身成仏義』における十六大菩薩生の問題、あるいは、それをうけた『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉を踏まえた上で、後世の教説を検討するということは、現在でもほとんどなされておらず、この『真言宗即身成仏義』と後世の教説がどのように関連するかは、不明なままとなっていた。そこで本論文では、これらを踏まえた上で、先に挙げた覚鑁・頼瑜・聖憲の教説について検討を行い、これまであまり明確にされてこなかった真言宗における機根論の展開の様相と、その思想の系譜というものを明らかにしたいと考える。

一　『即身成仏義』に見る十六大菩薩生の問題

空海の『即身成仏義』の冒頭では、『大日経』『金剛頂経』等の密教経論をもって、即身成仏の正当性とその内容について論証していく。

問曰。諸経論中皆説三劫成仏一。今建立即身成仏義有何憑拠一。答。秘密蔵中如来如是説。問。彼経説云何。答。金剛頂経説、修此三昧者現証仏菩提一。此三昧者謂大日尊一字頂輪王三摩地也。又云、若有衆生遇此教一昼夜四時精進修、現世証得歓喜地一、後十六生成正覚一。《中略》十六生者、指十六大菩薩生。『即身成仏義』（『大正新脩大蔵経』巻七七・三八一頁・中段）

ここで問題となるのが、波線部の二文である。まず、「修此三昧者…」は、『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌[④]』から

の引用文である。この文を鑑みれば、空海の説く即身成仏とは、この現世において、仏菩提を証得することだったと考えられる。その後に続いて、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』⑤から「若有衆生…」の一文が引用されているが、この中に登場する「後の十六生」こそ、空海自身述べる様に、十六大菩薩生のことなのである。

十六大菩薩生の出拠は、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』をはじめ、『大楽金剛不空真実三麽耶経般若波羅蜜多理趣品』（『理趣経』⑥）や、その註釈書である『大楽金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』（『般若理趣釈』⑦）等、空海以前の多くの密教経論に求めることが出来る。それらの中では、金剛界四仏の四親近である十六大菩薩の功徳を一身に得る生⑧、現世の外にある「生」として理解されている。また、『即身成仏義』に引用される文でもそのようになっており、このことから、空海の説く即身成仏とは、現世においては、歓喜地、即ち初地の分位まで証得し、その後に訪れる十六大菩薩生において成仏するというような、他宗同様に幾度かの生を経るものだったとも考えられる。しかし、空海は、この『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』に引き続いて、『菩提心論』の文を引用し、次のようにも述べている。

> 又竜猛菩薩菩提心論説、真言法中　即身成仏　故是説三三摩地法。於諸教中一欠而不レ書。是説三摩地法者法身自証三摩地。諸教者他受用身所説諸顕教也。又云、若人求仏慧、通達菩提心、父母所生身、速証大覚位。依如レ是等教理証文一成立此義。『即身成仏義』（『大正新脩大蔵経』巻七七・三八一頁・下段）

この文では、即身成仏とは、父と母より授かった身、つまり「現世」の段階で、大覚位を証得するものとされている。この文における即身成仏のイメージは、先の『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』のものに近い。であれば、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の内容とは、一体どのように解釈すべきなのだろうか。共に空海の即身成仏思想だとしても、その内容には明らかに矛盾が存在する。この点について、空海自身、「是の如き経論の字義差別云何。」と問うてはいるのだが、その後は、いわゆる六大・四曼・三密の体・相・用の関係について述べるのみで⑨、この二文の矛盾について具体的に論及することは無い。

二　『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉について

そこで、ここまでの『即身成仏義』の問題点を踏まえ、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉について検討してみたい。本書では、その冒頭において、次のように述べている。

> 問。此即身成仏之教為大小之機共被耶。為当有簡別耶。答。此有傍正二意。問。其二意如何。答。正為大機、傍被小機。問。何以得レ知正為大機傍被小機耶。答。大

日経云、仏子此大乗、真言行道法、我今正開演、為レ被ニ大乗器一。又云、復次秘密主於ニ当来世時一、劣慧諸衆生以ニ痴愛自蔽一、盲冥、楽ニ求果一不ニ知ニ解此道一。為レ度ニ彼等一故随順ニ説ニ是法一。故知正為ニ大機一傍被ニ小機一也。『真言宗即身成仏義』（『大正新脩大蔵経』巻七七・三八四頁・上段～中段）

まずここでは、「即身成仏之教」（＝真言密教）は、〈大機〉〈小機〉共に教化するものかどうかと言う問いが立てられ、それに対して、「傍」と「正」の二意があるとし、「正」の意としては、〈大機〉を教化するものなのだが、「傍」の意では〈小機〉も教化するものとしている。その上で、その〈大機〉〈小機〉の成仏について、以下の様に述べられている。

問。大機小機共修ニ此教一者二共即身成仏一耶。答。此不レ可レ爾。問。其意何。答。今意可レ云ニ大機即身成仏小機者後十六生成仏一。問。何以得レ知下大機即身成仏小機経ニ十六生一成仏上。答。経云、修ニ此三昧一者現証ニ仏菩提一。此即大機即身成仏之証文。若有ニ衆生一遇ニ此教一昼夜四時精進修一現世証ニ得歓喜地一、後十六生成ニ正覚一。此即小機成仏之証文也。『真言宗即身成仏義』（『大正新脩大蔵経』巻七七・三八四頁・中段）

この文では、〈大機〉のみが即身成仏（＝現証仏菩提）し、〈小機〉は、「後の十六生」に成仏に至るとされている。そして、先述した『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』と、『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の文こそ、〈大機〉〈小機〉それぞれの成仏を指した証文ともしているのである。近年の研究によれば、この『真言宗即身成仏義』は、空海没後の真言宗で、『即身成仏義』の参考書として製作されたのではないかと推測されており⑩、このことから、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉とは、『即身成仏義』に残された十六大菩薩生と即身成仏の解釈の問題を会通し、矛盾無く理解するための創意工夫だったとも考えられよう。

また、『真言宗即身成仏義』では、この〈大機〉〈小機〉について、次の様にも述べている。

問。小機経ニ十六生一、大機者不レ経耶。答。可レ云ニ大機亦経ニ十六生一也。問。若爾何云ニ即身成仏一耶。答。大小機雖レ云レ経ニ十六生一、横竪義故速遅各殊。『真言宗即身成仏義』（『大正新脩大蔵経』巻七七・三八四頁・下）

この文に拠れば、〈大機〉〈小機〉には「十六生」、すなわち十六大菩薩生の経る速度に差異が存在するのだと言う。すなわち、〈大機〉は「横」、つまり即身に十六大菩薩生を経て成仏し、〈小機〉は「竪」、つまり十六大菩薩生を一々次第して成仏するのだという。このことから、即身成仏する〈大機〉も、十六大菩薩生を経るという

ことが分かる。[11]

しかし、本来ならば、この〈大機〉〈小機〉のような機の格別を選ばずに、即身成仏させる力があることから、真言宗は余宗に勝るともされている。だが、ここで言う様に、大・小の二機を選別して、成仏に遅速があるとしてしまえば、それは、他の顕教諸宗と異ならない事になってしまう。この問題について、『真言宗即身成仏義』では次のように述べている。

> 問。不レ簡二大小機一令二即身成仏一者勝可レ見。既有二速遅一。何殊二余宗一耶。答。法相等宗経三大劫都無成仏之理。今此宗意者小機只経二十六生一成仏。尚勝二余宗一。（『真言宗即身成仏義』『大正新脩大蔵経』巻七七・三八四頁・下）

ここでは、法相宗の三阿僧祇劫成仏をはじめとする余宗の成仏は「無成仏の理」であり、対して、十六大菩薩生を「竪」に経る〈小機〉の成仏であっても、その余宗の成仏には勝るものとしている。しかし、余の顕教の成仏に比べて勝れてはいても、この〈小機〉の成仏は、〈大機〉の成仏、すなわち即身成仏とは選別されるものでもある。では、この〈小機〉の成仏とは、真言宗における成仏思想の中でどの様に理解すべきものなのだろうか。やはり、即身成仏に対する隔生成仏として理解すべきものなのだろうか。だが、『真言宗即身成仏義』において、これ以上に〈大機〉〈小機〉に論及した箇所は存在せず、結果として、〈小機〉の成仏に関する、真言宗での位置づけは不明確なままとなっている。

二　覚鑁における〈大機〉〈小機〉

以上のように、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉とは、空海の『即身成仏義』の持つ問題点、つまり即身成仏における十六大菩薩生の在り方から派生し、それを解釈した結果のものだということが分かった。本章では、この事を踏まえた上で、覚鑁の機根論について検討を行う。

まず『五輪九字明秘密釈』の「所化機人差別門」[12]では、次の様にある。

> 於二此所化機一総有二二類。一現身往生、二順次往生。於二現身門一又二別。一大機即身成仏、二小機即身成仏。又於二二各有一二。利鈍別故。（『五輪九字明秘密釈』『大正新脩大蔵経』巻七九・二一頁・下段）

この文によれば、真言宗所化の機根には、〈現身往生〉と〈順次往生〉、更に〈現身往生〉に〈大機即身成仏〉・〈小機即身成仏〉の二種、又、その〈大機即身成仏〉〈小機即身成仏〉それぞれに利・鈍の計五種の差別が有るとする。その五種に関する覚鑁の解釈について、以下にまとめておく。

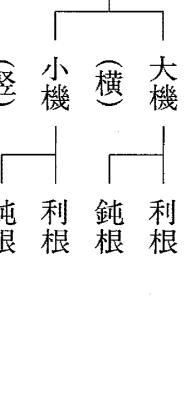
①〈大機利根〉は、法界体性三昧[13]に「横」、すなわち次第を経ずに直入する機根で、覚鑁は、この〈大機利根〉の三昧を、「大機横観の三摩地」とも呼称している[14]。

②〈大機鈍根〉とは、その法界体性三昧に「竪」、すなわち次第して入り、五輪の種子、十五種の金剛三昧を順々に観じて即身成仏する機根のことである。彼らの三昧は、「漸竪観」とも呼称される[15]。また、この〈大機鈍根〉と先の〈大機利根〉は、共に「心王」本尊・普門大日如来の下、即身成仏に至る行者とされている。

③対して〈小機利根〉は、大日如来の眷属、心王に対する心数別尊の種子を観じ、三密を修行して成仏する機根である[16]。

④同様に〈小機鈍根〉も、心数別尊の元で修行を積む行者だが、〈小機利根〉が即身成仏するのに対し、〈小機鈍根〉は、「此の生に十六大菩薩位を経て」成仏するとされている[17]。

⑤〈順次往生〉は、『五輪九字明秘密釈』「発起問答決疑門」で言うところの「但信行浅」の者で、先の〈大機〉〈小機〉の様に即身成仏する機根では無く、密厳乃至応化仏の十方浄土への願生者を指した機根と考えられる[18]。



以上が、覚鑁が『五輪九字明秘密釈』において説いた五種の機である。次に、この五種の機根の説かれた背景について考えてみたい。

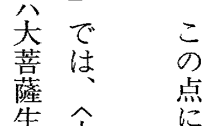
まず〈順次往生〉については、従来の指摘通り、覚鑁と同時代に興隆した浄土教をうけてのものなのは間違いない。では、〈大機即身成仏〉〈小機即身成仏〉についてはどうだろうか。これについては、『五輪九字明秘密釈』の撰述とほぼ同時期の、康治元年（一一四二年）の八月、覚鑁が根来山に退いた後、彼の地で開催した談義[19]において、次のような言葉が残されている。

> 次昼夜四時精進修文有二大小一ノ二機。《…中略…》心王為二本尊一ト行者心数為二本尊一ト行者、同行シテ四時精進スルニ心王行者極速成就シ心数ノ行者遅ハク成就ス。『打聞集』（『興教大師全集』巻上・五七一頁～五七二頁）

ここで論及されている「昼夜四時精進修文」とは、先述した『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の「若し衆生有りて此教に遇いて昼夜四時に精進し修すれば…」[20]の一文のことであろう。であれば、この文に関して大・小の二機があるとしているが、これは明らかに、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉を指しての文言と言える。その上で、『五輪九字明秘密釈』同様に、「心王」大日如来を本尊とする行者、「心数」別尊を本尊とする行者についても述べていることから、そもそも『五輪九字明秘密釈』の機根論とは、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉を念頭に置いて作り上げられたもの

ということは明らかである。[21]

そこで、この覚鑁における展開というものについて、次に考えてみたい。これについて、まず考えられるのは、〈大機〉〈小機〉に利・鈍の別を立て、五種の機根とした点であろう。また、更に注目すべき点として、〈小機即身成仏〉の一つとして、〈小機鈍根〉を立てるなか、その機根の成仏について、次の様に述べることが挙げられる。

> 小機鈍根入二蓮華三昧一観二四字。於二四時中一応下於二如レ是勝三摩地一四種威儀不二暫放捨一。此生次第経中於十六大菩薩位上。
>
> 『五輪九字明秘密釈』（『大正新脩大蔵経』巻七九・一二頁・上段）

先に検討した『真言宗即身成仏義』では、十六大菩薩生を経る〈小機〉の成仏は、余宗の成仏には勝るものだと述べてはいたが、それが、真言宗の成仏思想の中、どの様に位置づけられるのかについては明らかにされておらず、この点に問題を残すかたちとなっていた。

対して『五輪九字明秘密釈』では、〈小機鈍根〉は、「此の生」において「十六大菩薩位」＝十六大菩薩生を経過して成仏にいたるが、その成仏も〈小機即身成仏〉、つまり即身成仏の一種とされている。これは図らずも、先の『真言宗即身成仏義』の問題点に答えるかたちとなっているのである。

これらのことを踏まえれば、覚鑁の機根論とは、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉を継承し、その問題点の解決も含めて、展開されたものであることが分かる。

四　〈大機〉〈小機〉と一生・二生成仏

鎌倉時代に入ると、この〈大機〉〈小機〉に、「一生成仏」「二生成仏」を配当する教説が登場してくる。本章では、前章までの検討を踏まえ、その頼瑜の教説を中心として、〈大機〉〈小機〉の解釈について検討してみたい。

1　頼瑜における〈大機〉〈小機〉

この頼瑜の機根論を考える上で、大きな指針となるのが、『大日経疏指心鈔』（以下『指心鈔』）の次の文である。

> 凡於二真言機一利・鈍二機分。或云二頓・漸二機一、或云二大機・小機一、或云二一生成仏・二生成仏一、或云二即身成仏・即身成菩薩一、或云二聞時証・漸次証一也。『大日経疏指心鈔』巻十五（『大正新脩大蔵経』巻五九・七七六頁・中段）

この文によれば、〈大機〉＝〈利機〉は「一生成仏」、「即身成仏」し、〈小機〉＝〈鈍機〉は「二生成仏」、「十地菩薩境界」を超えて、「即身成菩薩」すると言う。

この〈大機〉〈小機〉にそれぞれ配当される、「一生成仏」「二生成仏」「即身成菩薩」の文言は、先の覚鑁にも、『真言宗即身成仏義』にも見られなかったものである。ただ「一生成仏」に関しては、「即身成仏」と言う文言と対応させられていることから、『菩提心論』に説くところの、「父母所生身」において成仏する、いわゆる即身成仏であると考えることが出来よう。では「二生成仏」「即身成菩薩」とは、一体どのようなものなのであろうか。頼瑜は、『真俗雑記問答鈔』において、この「二生成仏」に関して次の様に述べている。

又、二生成仏云、非二如常多劫修行隔生之義一。同以二肉身一雖レ至二仏位一。菩薩生経不レ経之異也。故倶真言不共之行也。『真俗雑記問答鈔』（『真言宗全書』巻三七・十四頁・下段）

この文言を鑑みれば、「二生成仏」とは、法相宗等に代表される他宗の説く所の歴劫成仏ではなく、「肉身」即ち「父母所生身」を以て成仏することだとしている。では何故、「一生成仏」「二生成仏」と別があるのかというと、それは「菩薩生」を「経るか・経ないか」の相違であるという。この「二生成仏」と「菩薩生」に関しては、同じく『真俗雑記問答鈔』中に、より詳しい内容が見られる。

問。不空所訳金剛頂勝三界経説文殊師利菩薩説秘密真言云、但心信受経十六生、次成正覚文。今此文者可レ云レ説一生成仏耶。答。私案云非一生成仏可答申也。問。即身成仏是真言不共之軌則也。仍今文非一生成仏耶。依レ之大師即身義中、三摩地儀軌彼十六生成正覚之文為二即身成仏之証一給。如何。答云。非一生成仏答申意者、既経十六生次成正覚文、経十六大菩薩之位次至二仏位一。故可二一生成仏一。『真俗雑記問答鈔』（『真言宗全書』巻三七・十四頁・上段）

この文を見れば分かるように、「二生成仏」とは、つまるところ、先章において検討した十六大菩薩生を経て仏位に至る成仏のことなのである。また『菩提心論愚草』にも、「真宗（＝真言宗）において利鈍分かつが故に従凡入仏位を即身成仏と云い、十六生を経るを二生と云う。隔生には非ざるなり。」ともあり、更に、空海の『即身成仏義』の注釈書である『即身成仏義顕得鈔』（以下顕得鈔）では、次のようにも述べられている。

問。縦雖三十六生非二隔生一、全不レ可レ云二即身成仏一。今於二此宗中一有二一生二生等之大小二機一。故別本云、問。大小機共即身成仏耶。答。此不レ可レ然。大機即身成仏、小機者後十六生成仏取意。又雑問答中、以二現証仏菩提等文一為二即身成仏之証文一、以二後十六生成正覚等文一為二即成菩薩之憑拠一。『即身成仏義顕得鈔』巻上（『真言宗全書』巻十三・十四頁・上～下段）

この文言から、頼瑜の言う〈大機〉＝「一生成仏」、〈小機〉＝「二生成仏」とは、基本的には、『真言宗即身成仏義』のそれを別の形で言い直したものであり、先の覚鑁同様、その定義が曖昧な「後の十六生」を経る成仏について、より明確に定義したものとも言えるだろう。しかし、その〈小機〉＝「二生成仏」については、最初に出した『真俗雑記問答鈔』の文でもそうであったが、余宗の隔生成仏とは異なり、肉身を捨てない即身成仏中の一種だと、頼瑜は解釈している。これについては、『指心鈔』にも次のように述べられている。

> 此即以二真言究竟成仏一非レ待二顕家ノ時分成仏一乎。或又此即身成仏与二一生成仏一有二寛狭一。一生二生同不レ捨二肉身一故即身成仏ノ摂也。『大日経疏指心鈔』巻十（『大正新脩大蔵経』巻五九・七一三頁・中段）

これらのことから、頼瑜は、『真言宗即身成仏義』の〈小機〉の成仏、「後十六生成正覚」を以て、真言宗における「二生成仏」であるとし、更に、それを、即身成仏の中の一つとすることで、『真言宗即身成仏義』に残された問題点、〈小機〉の「後十六生」を経る成仏の定義を行おうとしたのではないかと考える。

2 「一生成仏」「二生成仏」の思想的淵源

しかし、頼瑜の言う〈小機〉＝「二生成仏」が、『真言宗即身成仏義』等で論及されてきた十六大菩薩生を経ての即身成仏の言い換えだったとしても、何故頼瑜は、それを「二生成仏」と呼称したのか。又、その「二生成仏」＝「即身成菩薩」の出拠は何なのかと言う疑問は残る。そこで、この問題を考える上で、次の二冊の書物が挙げられる。一つは、『異本即身義』と並んで、空海偽撰の書として名高い『雑問答』であり[22]、今一つは、頼瑜と同じく鎌倉時代に活躍した道範（一一七八？～一二五二）が、師である覚海（一一四二～一二二三）の口説を記したとされる『大日経疏除暗鈔』（以下『除暗鈔』）である。

まず、『雑問答』には、次の様な一文が存在している。

> 如今真言行者如レ是観修幾生成仏。対。一生二生随レ機不定。経レ劫満レ行成道之言常途所論。今何云二一二生成道一。対。三密相応如説修行、或即身超二十地一至一生補処位一、或一生入二仏位一。是秘密乗力耳。其誠証何。対。金剛頂経説修二此三昧一者ハ現証二仏菩提一。又云、若能依二此勝義一修現世得レ成二無上覚一。《中略》依二如レ是文一立二即身一生補処義一而已。大意略如二儀軌一。（『雑問答』（『弘法大師全集』巻四・一九五頁）

この『雑問答』に拠れば、真言宗における一生・二生成仏と、

「即身に十地を超えて一生補処位に至る」、「一生に仏位に入る」と言う定義まで述べられている。また、この『雑問答』では、「一生入仏位」、つまり「一生成仏」に対して、「即身に十地を超えて、一生補処位に至る」、「即身一生補処義」と言う定義までもが述べられている。「一生補処」とは、言うまでもなく菩薩に於ける最高位のことで、これを言い換えたものが、頼瑜の言う「即身成菩薩」と考えることも出来るだろう。これらの事実を踏まえれば、頼瑜の教説の大元には、この『雑問答』の内容があると言える。

しかし、この『雑問答』では、一生・二生成仏と〈大機〉〈小機〉、〈利機〉〈鈍機〉の関係については述べられておらず、又、肝心の十六大菩薩生と「二生成仏」との関係についても、明確には述べられていない。そこで重要となってくるのが、覚海伝・道範記の『除暗鈔』である。その『除暗鈔』の巻二には、次のような文言が見られる。

> 問答云、如今真言行者如レ是観修幾生成仏。対。一生二生随レ機不定文。《…中略…》一生二生随機不定者此有二数義一。『大日経疏除暗鈔』巻二（『続真言宗全書』巻五・三二頁・下段～三三頁・上段）

この文に於ける「問答」とは、先に挙げた『雑問答』のことである。[23]『除暗鈔』によれば、その『雑問答』の「一生二生は随機不定」の文には複数の義が有るとして、次の様に述べる。

> 一云、一生者即身之中頓機現証仏菩薩之人也。二生者即身之中漸悟十六生成覚之人也。二生者有二数生一故云レ二也。『大日経疏除暗鈔』巻二（『続真言宗全書』巻五・三二頁・上段）

ここでは、一生成仏と二生成仏を指して、即身成仏中の〈頓機〉〈漸機〉とし、更に一生成仏＝〈頓機〉は、現身に仏位に入り、二生成仏は、即身成仏中の漸悟の機で、十六大菩薩生において正覚を成じるとしている。『除暗鈔』は、この〈漸機〉も即身成仏だとしているが、「二生とは数生有るが故に二と云う也」とも述べており、二生成仏は、仏位に到るまでに具体的に数生を経ることも明かしている。更に『除暗鈔』では、次の様にも述べている。

> 一云。以二十六生成正覚之文一為二即身一生補処之証一。既云成正覚、是非二成仏一乎。故且約二因果功徳一論二一生二生一、謂二一生者合二十六生一為二一生一是因也。以二仏地一為二一生一是果也。『大日経疏除暗鈔』巻二（『続真言宗全書』巻五・三二頁・上段）

ここでは、空海の『即身成仏義』の「後十六生成正覚」の文を以て、『雑問答』にいう二生成仏＝即身一生補処の文証としている。更に、二生成仏の、一生目とは十六大菩薩生を集合したもので、因

果の功徳に約して論じた場合、一生目が「因」、二生目が「果」に当たるともしている。

この段階で、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉と、『雑問答』における「一生成仏」「二生成仏」が組み合わされ、更に「二生成仏」とは、十六大菩薩生を経ての成仏と解釈されるようになったと考えられる。つまり、頼瑜が『指心鈔』や『顕得鈔』『真俗雑記問答鈔』等で述べた〈大機〉〈小機〉の解釈とは、基本的には『真言宗即身成仏義』や『雑問答』の教説の影響下にあるが、それは、『除暗鈔』で施された解釈を受けてのものなのである。また、このことから、鎌倉時代の真言宗で、先の『真言宗即身成仏義』と『雑問答』を組み合わせ、〈小機〉の「後十六生成正覚」を「二生成仏」とする解釈が、一つの潮流となっていたのではないかとも考える。

五　『大疏百条』の〈大機〉〈小機〉〈結縁機〉

室町期に登場し、後の新義真言宗の機根論の綱要を完成したと言われる『大疏百条』では、次のような〈大機〉〈小機〉の解釈が述べられている。

> 宗本意即身成仏教故、於発心生雖可成仏、根機万差故、可有隔生類歟。凡定密機不過三類。一大機二小機、三結縁機也。此中大小二機雖一門普門得果不同也、於成仏位不可云隔生。雖遇此教一生不成仏可云結縁機也。
>
> （『大疏百条第三重』巻二（『大正新脩大蔵経』巻七九・六一九頁・上～中段）

『大疏百条』では、真言宗における機の差別として、〈大機〉〈小機〉〈結縁機〉の三種を挙げる。この大小の二機について、直接大日如来の法門（普門）で修行するか、他の諸尊の法門（一門）で修行するかによって得果に差別はあるものの、何れも一生中に成仏する機根、即ち即身成仏の機根だとする。

それに対して、一生中に成仏出来ない、つまり隔生における成仏を期する者達を「結縁機」とする。東密では秘密の法門を相伝することを伝法といい、対して、単に仏道に対して因縁を作ることを結縁と呼称する。『大疏百条』では、隔生成仏する者は、そのような低い段階の機根だとしているのである。更に『大疏百条』では、次のようにも述べている。

> 一。正機即身成仏傍機可有経遠劫之類者、前所出三類中以何為傍正乎。答。一本即身義云、大機正機小機傍機云云。
>
> （『大疏百条第三重』巻二（『大正新脩大蔵経』巻七九・六二〇頁・上段）

ここでは、『真言宗即身成仏義』を援用しながら、普門大日如来のもと、一生中に成仏する〈大機〉を正機とし、一生中に成仏するが、

一門諸尊のもと成仏する〈小機〉は、又傍機でもあるとしている。[24]

密機 ┬ 大機（正機）…普門大日如来の元で即身成仏する。
　　 ├ 小機（傍機）…一門の諸尊の元で即身成仏する。
　　 └ 結縁機　…隔生成仏する。

ここまで見た内容からも明らかなように、『大疏百条』の機根論とは、細かな名称の差こそあれ、ほぼ覚鑁の説と同じと言える。又、ここで登場する結縁機と言う呼称も、既に頼瑜の書物の中で散見されるものでもある。[25]しかし、この『大疏百条』の〈大機〉〈小機〉には、先の覚鑁や頼瑜とは異なり、十六大菩薩生への論及というものが全く見られない。『大疏百条』では、この十六大菩薩生と〈大機〉〈小機〉の関係について、どの様に考えていたのだろうか。

この『大疏百条』巻一では、ここまで言及した〈大機〉〈小機〉〈結縁機〉の悉地について論じた後、十六大菩薩生について、次の様に述べている。

> 又十六生有下為ニ隔生一儀軌説上歟可レ勘レ之。若爾設雖レ経ニ多生一、望ニ二大遠劫一少分　属レ無。可レ云ニ即身成仏一也。（『大疏百条第三重』巻一（『大正新脩大蔵経』巻七九・六一九頁・中段）

ここで言う「儀軌説」とは、空海『即身成仏義』や『真言宗即身成仏義』の中で論及されていた『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』等を指した文言であろう。この文では、この「十六生」を経て成仏することを以て、「多生を経る」成仏としており、更に、それを以て、余宗の三劫成仏に対すれば、「少分」であるから、即身成仏だとしている。これは、『真言宗即身成仏義』、或いは頼瑜が既に説くところの内容と同じである。しかし、ここには、頼瑜の説いた「一生成仏」や「二生成仏」といった内容は見られず、また、先に挙げた〈結縁機〉との関連も述べられていない。

以上の検討から、『大疏百条』の機根論とは、基本的な構造としては、覚鑁の教説によったものであり、細かな部分での解釈においては、頼瑜や『真言宗即身成仏義』の教説を流用したものだということが分かった。しかし、前者とは異なり、この『大疏百条』では、〈大機〉〈小機〉についても、十六大菩薩生を「経る・経ない」ではなく、普門大日如来の行者であるか、一門別尊の行者であるかという一点のみで分類がなされており、また、隔生成仏するはずの〈結縁機〉においても、その成仏と十六大菩薩生との関係性については全く言及されていなかった。これらの事から、『大疏百条』の〈大機〉〈小機〉の機根論とは、確かに覚鑁や頼瑜の教説を踏まえたものではあるが、『真言宗即身成仏義』を発端として考えた場合、その問題とするところも異なっており、覚鑁や頼瑜とは系統の異なる教説と考えなければならないだろう。

まとめと今後の課題

以上、ここまでの検討についてまとめる。

まず『真言宗即身成仏義』では、『即身成仏義』中に引用された『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』と『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の二文の矛盾に注目し、それぞれの文が真言宗における〈大機〉の成仏（＝即身成仏）、〈小機〉の成仏（＝後十六生成仏）を指したものと解釈し、『即身成仏義』の問題点を会通するかたちで〈大機〉〈小機〉について述べていた。しかし、その『真言宗即身成仏義』の解釈では、その「後十六生成正覚」と即身成仏の関係、或いは、その十六大菩薩生を「竪」に経る成仏を、真言宗の成仏思想の中でどのように位置づけるかについては問題を残すかたちともなっていた。

この『真言宗即身成仏義』が撰述された後に登場した覚鑁は、その『真言宗即身成仏義』を念頭におきながら、『五輪九字明秘密釈』で五種の機根論を説き、「後十六生成仏」もまた、即身成仏の一種であるとしていた。更に、その覚鑁没後の百年後に登場した頼瑜も、『真言宗即身成仏義』をうけながら、〈大機〉〈小機〉を解釈する中、〈大機〉の成仏を真言宗における「一生成仏」とし、〈小機〉の「後十六生成仏」については、即身成仏中の「二生成仏」としていた。この覚鑁と頼瑜の機根論は、先の『真言宗即身成仏』を踏まえて考えた場合、その問題点に解答を行うかたちとなっており、このことから、覚鑁と頼瑜の〈大機〉〈小機〉の解釈とは、『真言宗即身成仏義』の内容を継承し、更に、そこに残された問題点を解決した結果、展開されたものと考えられる。

ただし『大疏百条』の〈大機〉〈小機〉については、基本的な構造こそ覚鑁の教説を継承しているものの、その機根の分類においては、十六大菩薩生について論及しておらず、このことから、覚鑁や頼瑜をはじめ、『真言宗即身成仏義』からはじまる一連の展開とは考えにくいものとなっていた。そこで、この『大疏百条』の機根論については、聖憲と同じく室町時代に活躍した宥快（一三四五～一四一六）や杲宝（一三〇六～一三六二）、その後に登場する玄宥（一五二九～一六〇五）等の教説を踏まえた上で、改めて思想的な位置づけを探る必要があると考える。

これまで、真言宗の〈大機〉〈小機〉の機根論について、その発端と展開が明言されることは無かったが、今回の検討から、そもそも〈大機〉〈小機〉の機根論とは、『即身成仏義』における十六大菩薩生の問題と、それをうけた『真言宗即身成仏義』に端を発したもので、その『真言宗即身成仏義』を継承し、問題点を回答したものが、後世の展開だと言うことが分かった。しかし、当の覚鑁と頼瑜の教説の関係性については、今回の検討で明かす事は出来なかった。そこで、この両者間での教説の関係性と展開について詳細に検討し、改めて考察することも、今後の課題として挙げられる。

註

① 松崎恵水「異本即身義について」（『空海の思想と文化』巻上・平成十六年・ノンブル社）参照。

② 現在でも、『五輪九字明秘密釈』の正確な撰述年は特定されていな

いが、苫米地誠一「興教大師の機根観①」（『大正大学総合仏教研究所年報』十五。平成二年）をはじめ、多くの研究では、保延六年（一一四〇）の覚鑁根来山隠遁から、康治二年（一一四三）の示寂の間に撰述されたとして取り扱っている。この事から、少なくとも『五輪九字明秘密釈』撰述の二五年以上前には、『真言宗即身成仏義』の〈大機〉〈小機〉は成立していたと言える。

③ 加藤精一『弘法大師思想論』（平成十四年。春秋社）参照。

④ 『大正新脩大蔵経』巻十九・三二〇頁・下段参照。

⑤ 『大正新脩大蔵経』巻十八・三三一頁・中段参照。

⑥ 『大正新脩大蔵経』巻八・七八四頁・中段参照。

⑦ 『大正新脩大蔵経』巻十九・六〇九頁・上～中段参照。

⑧ 『密教大辞典』の「十六生」の項（八九八頁・上段）参照。

⑨ 『大正新脩大蔵経』巻七七・三八一頁・下段参照。

⑩ 松崎恵水「『異本即身義』について」（『空海の思想と文化』巻上。平成十六年。ノンブル社）。

⑪ 『大正新脩大蔵経』巻七七・三八五頁・上段参照。

⑫ 『五輪九字明秘密釈』は択法権実同趣・正入秘密真言・所獲功徳無比・所作自成密行・纏集一行成多・上品上正現証・覚知魔事対治・即身成仏真行・所化機人差別・発起問答決疑の全十門からなる。

⑬ 法界体性三昧とは、衆生本有の智（薩埵）を以て、法界の性となる阿字本不生の理を観じることで、大日如来自体が、一切如来を内徳として包含し法界に遍満している事、その一念・一音・一動が、三世十方を貫徹している事を感得する三昧である。詳しくは、那須政隆『五輪九字明秘密釈』の研究』（昭和十一年。鹿野苑）参照。

⑭ 「謂大機利根者。直入法界体性三昧。横観法界即身成仏。所謂一切衆生本有薩埵。法爾応住普賢大菩提心。本有字所観之体。本不生智能観之体。《…中略…》能観縁慮之一心。所観字相之一境。能所一体証空理時即身成仏。是名大機横観三摩地。」『五輪九字明秘密釈』（『大正新脩大蔵経』巻七九・二一一頁・下段）

⑮ 「大機鈍根竪入法界体性三昧観観本有五輪種子。此五字即十五種金剛三昧。《中略》首尾倶亡見本心時即身成仏。是名漸竪観已上共心王機」『五輪九字明秘密釈』（『大正新脩大蔵経』巻七九・二一一頁・下段）

⑯ 「小機利根就心数別本尊。且約観音行者一釈之。本有九重字一切衆生本有観音種子。依慚愧不可得義。能信自性清浄妙蓮不染覚悟蓮華。於四時不令間断修三密行。住開敷蓮華印。誦明。住慚愧不可得理。証見本初覚蓮。是名小機観即身成仏。」『五輪九字明秘密釈』（『大正新脩大蔵経』巻七九・二一一頁・下段～二二頁・上段）

⑰ 「小機鈍根入蓮華三昧観四字。於四時中応於如是勝三摩地四種威儀不暫放捨。此生次第経中於十六大菩薩位上」『五輪九字明秘密釈』（『大正新脩大蔵経』巻七九・二二頁・上段）

⑱ 苫米地誠一氏「興教大師の機根観①」（『大正大学総合仏教研究所年報』十五。平成二年）「興教大師の機根観②」（『智豊合同教学大会紀要』四二・平成二年）参照。

⑲ 康治元年（一一四二年）八月二十九日の『即身成仏義』談義を指す。

⑳ 『大正新脩大蔵経』巻十八・三三一頁・中段参照。

㉑ 従来、覚鑁における『異本即身成仏義』の影響については、論及されることは極めて少なかったが、覚鑁自身が強く影響を受けたとされる済暹も、『異本即身成仏義』に強く注意を払っていた事が、近年わかってきた。そこで、今回の問題も含め、覚鑁の思想と『異本即身成仏義』の結びつきについては、今後、より検討する必要があるとも考える。

㉒ 『頼瑜―その生涯と思想―』（平成十二年。智山伝法院）参照。

㉓ 『頼瑜―その生涯と思想―』（平成十二年。智山伝法院）参照。

㉔ 勝又俊教『真言の教学』上（昭和五六年。国書刊行会）参照。

㉕ 『頼瑜―その生涯と思想―』（平成十二年。智山伝法院）参照。